



////////////////////////////////////

日本植物分類学会 ニュースレター

////////////////////////////////////

No. 68

Feb. 2018

今号のトピックス

学会賞，奨励賞，論文賞が決まりました→2～3ページ
 まもなく開催されます第17回大会（金沢）の
 公開シンポジウムのご案内があります→8ページ

目 次

諸報告

2018年度第17回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞） 受賞者の決定	2
2018年度第12回日本植物分類学会論文賞の決定	3
2017年度野外研修会（菅島）の報告	3
2017年度野外研修会を終えて	5
2017年度日本植物分類学会講演会の報告	5
日本植物分類学会講演会に参加して	6
2017年度第4回メール評議員会議事抄録	7

お知らせ

2018年度第17回日本植物分類学会公開シンポジウム 「郷土植物学が支える日本の科学」のご案内	8
石川県立自然史資料館標本庫見学会のお知らせ	9
評議員会開催のお知らせ	9
2018年度総会のお知らせと審議事項	10
会員消息	15

諸報告

2018年度第17回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定

学会賞選考委員会委員長 永益 英敏

学会賞選考委員会において、ご本人や推薦人から提出いただいた研究概要と業績リストなどの資料等をもとに協議いたしました。その結果、下記のように学会賞として2名、奨励賞として2名の方の受賞が決定しましたのでお知らせします。（それぞれ五十音順）

学会賞

戸部 博（京都大学名誉教授）

「被子植物分類群の花と生殖器官の特徴と進化の研究」

若杉 孝生（越前町立福井総合植物園名誉館長）

「福井県を中心とする植物相研究を通じた分類学への貢献」

奨励賞

阪口 翔太（京都大学大学院人間・環境学研究科助教）

「生態遺伝アプローチによる植物の進化・多様性研究」

田金 秀一郎（九州大学大学院理学研究院学術研究員）

「アセスメント手法を活用した東南アジアの植物多様性研究」

授賞理由は以下の通りです。

学会賞：

戸部氏は、主に被子植物を対象として、さまざまな分類群の花、生殖器官、花粉、染色体などの形態的特徴から、分類群としての評価と類縁関係、形態形質の進化の研究を行なってこられました。研究対象は基部被子植物、単子葉植物、真正双子葉植物など被子植物全体に及び、被子植物64目のうち30目にわたる分類群の研究成果を160編の論文として発表されています。また、多くの編著書と訳書を通じて、植物分類学の普及にも努められました。1994年から1999年には編集委員長、2008年から2011年には会長として、日本植物分類学会の発展に大いに貢献されました。

若杉氏は、福井県を中心とした植物相研究に長く携わってこられました。多くの報文を発表され、『福井県植物図鑑』（福井県植物研究会、1997-2001）の出版にあたっては、編集代表として貢献されました。また、福井総合植物園の整備計画策定委員として、自然の地形と植生を生かした様々な環境の自生・植栽展示、植物学の学習が可能な屋内展示スペースと植物標本館を備えた植物館をもつ先進的な植物園の建設にも取り組まれました。1994年からは福井総合植物園長、2006年からは名誉園長を務められ、植物分類学の普及・発展に大きく貢献されました。

このように、お二人は植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献があったと認められましたので、その功績を称え、日本植物分類学会賞に選出いたしました。

奨励賞：

阪口氏は、分子マーカーとフィールド調査を組み合わせ、植物の多様化における集団動態と環境適応について、さまざまな研究を進められています。東アジアやオーストラリアの植物を材料に、系統解析により形質進化を調べるほか、大量のサンプルにもとづいて遺伝的集団デモグラフィを推定することで、過去におきた環境変動の影響を評価しています。また、シカの過採食、採鋤、森林火災などによる植物群集への影響を、遺伝学的な解析により明らかにするなど、植物多様性の保全

についても積極的に取り組まれています。

田金氏は、東南アジアの植物種の多様性評価と、それに基づく熱帯林の保全対策に関わる研究に取り組まれています。東南アジアの広い地域で、同一のトランセクト調査法による全維管束植物相をもちいて多様性評価を行い、36,000点を超える植物のデータを標本、生態写真、DNA解析用資料とともに記録されました。国際的な協力関係のもとに、これらのデータに基づいて数多くの新種を発表され、DNA配列情報をもちいた系統地理学的研究や、地域の植物相のチェックリスト・図鑑の作成を進められています。

このように、お二人は優れた研究業績をあげた将来有望な若手研究者であり、その功績を高く評価し、日本植物分類学会奨励賞に選出いたしました。

2018年度第12回日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員長 田村 実

2018年度第12回日本植物分類学会論文賞は、2017年に出版された英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』68巻および和文誌『分類』17巻に掲載された論文のうち、編集委員および論文賞選考委員から推薦された論文9編を論文賞選考委員会において審査し、次の2論文に決定しました。

Wakasugi, Y., H. Azuma, A. Naiki & S. Nishida. 2017. Morphological and molecular phylogenetic analyses of *Geranium yesoense* (Geraniaceae) in Japan. Acta Phytotax. Geobot. 68(3): 129–144.

選考理由：本研究では、*Geranium yesoense*の種内分類群の形態的特徴を定量的に評価し、葉や萼毛等では明瞭には区別できないことを明らかにした上で、分子系統学的手法によってそれらの種内分類群が支持されないことを示し、種内分類群を認めずにシノニムとした。地域個体群には、地域ごとに独特な形態的傾向が見られることがあり、それらを分類群として区別することで分類に多様性がより詳しく反映されることもあるが、逆に細かく分けすぎて、分類が混乱することもある。その意味で、客観的データに基づいて種内分類群を整理したことは評価されるべきと考える。

武田眞一・黒沢高秀. 2017. スミレ属無茎種コスミレとノジスミレの冬芽形成時期から開花期にかけての花器官の形態変化および春の閉鎖花とその由来. 分類 17(1): 25–41.

選考理由：冬芽内に形成された花芽の観察によって、スミレ属無茎種では、これまで知られていた越冬後に開放花の後で形成される閉鎖花（当年夏秋閉鎖花）だけではなく、冬芽内で開放花の前や後に形成される閉鎖花（それぞれ越冬早春閉鎖花と越冬春閉鎖花）が存在することを明らかにした。閉鎖花の形成時期や発達過程が多様であることを示し、体系的な比較研究の必要性を指摘した点で評価できる。

2017年度野外研修会（菅島）の報告

川辺 龍太郎

2013年、一念発起して北広島での野外研修会に参加して以来、新しい植物や人々との出会いにすっかり惹きつけられてしまい、毎年必ず野外研修会に参加するようになって5年目になった。

今年は、運悪く台風18号接近のため予定の半分足らずの日程になってしまったのだが、それでも多くの実りある研修となった。

9月15日(金), 鳥羽マリナーミナルに集合したのは20人ほど。懐かしい顔がいくつか見られる。港からチャーター船「なぎさ」に乗って萱島へ。空は曇っているが海は風もなく穏やかで台風の接近を感じない。15分ほどで萱島に到着。徒歩数分の宿泊施設(別館松村)に荷物を置きさっそく萱島の観察に出かけた。

出発点は島の北東部の端にあたり、そこから南西方向へ島の最高峰大山(236.6 m)を目指して歩き、山頂から北東部へ降りて出発点に戻る輪を描いたような観察ルートであった。出発点である島唯一の集落を抜けると背の低い樹木の間を登山道が続く。ここでは、私の住んでいる京都で見ることのないサカキカズラ、オオフユイチゴ、ホウライカズラに出会った。他にはフウトウカズラ、カンアオイ、マンリョウ、タイミンタチバナ、ハマクサギ、アキカラマツなどが見られた。



写真1. 萱島(大山山頂が見えている)

だんだん標高が高くなって海が見下ろせるようになってきたところに異様に葉が小さくツゲのようでツゲでない低木に出会う。案内して頂いた山脇さん(近畿植物同好会)に確かめるとツゲだとのこと。蛇紋岩地帯に入り、その影響を受けて植物が矮小化しているのだ。ガマズミ、ズミ、イヌザンショウなど矮小化したものが次々と現れた。とりわけイヌザンショウの矮小化は激しく、葉だけではイヌザンショウには見えず、葉の香りや棘の出方でイヌザンショウと判断した。蛇紋岩の影響なのだろう、コウヤザサ、ヒロハドウダンツツジ、ジングウツツジ、シマジタムラソウといった珍しいものも次々と現れた。

少し行くと大山の山頂だった。樹木が少しまばらになっていて、ヤマジソ、スズサイコ、ヒロハスズサイコなど珍しい草本に出会った。山頂付近にはトダシバ、イブキジャコウソウ、メギ(紅葉していた!), マルバアオダモ、ヌルデ、ススキ、アカメガシワ、クロマツ、クマヤナギ、モッコク、キキョウ、マツバハルシャギク(北米原産)などが見られた。京都では庭によく植栽されているモッコクだが、ここは自然分布なのだろう。考えてみれば、天然のモッコクとは初めての出会いになる。



写真2. 矮小化したイヌザンショウ



写真3. 大山山頂付近

気がつくと夕暮れ時が近づいており、あわてて来た道とは反対側の北東の道を集落に向けて急いだ。低地の舗装道路に出た頃にはすっかり真っ暗になってしまった。小さな島なのだが歩いていても歩いていても集落にたどり着けず、だいぶ不安になっていたところに迎えの車に来てもらい無事宿舎につくことができた。

夕食後、山頂でも解説していただいた藤井伸二氏(人間環境大学)から「キノクニスゲの分布からの考察」という貴重な講演をしていただいた。

翌日(9月16日)は、台風18号の影響が海にも現れ始めていたので慌ただしく船に乗り帰途についた。予定の半分にも満たない行程になったが、私には蛇紋岩地帯の特徴ある植生を知る爽りの多い研修だった。伝えたいことが半分も伝えられなかった山脇氏はさぞ残念だったと思うが。不安定

な天候の中、臨機応変の対応をしていただいた福田知子氏（三重大学）、山脇和也氏に心より感謝いたします。

2017 年度野外研修会を終えて

倉田 正観（東京大学大学院総合文化研究科
広域科学専攻広域システム科学系 伊藤研究室）

今回の研修で訪れた菅島は、三重県の南東部に位置し伊勢志摩国立公園に含まれます。今回の研修では島の中央部に位置する大山（標高236.6 m）に登り植物を観察しました。大山は蛇紋岩地として有名で、山の南側には大規模な採石場が存在し、山頂付近からその採石場を眺めることができます。また登山道の所々に蛇紋岩の露出箇所が存在するため、蛇紋岩そのものや、樹木が生育できず草地在りという蛇紋岩地特有の光景、そこに生育する草本も普段見慣れているものとは少し違った姿をしている様子が観察できます。私が住んでいる地域には蛇紋岩地帯がないため、普段ではなかなか観察することができない植物に触れることができ、非常に満足できる研修会でした。観察できた植物の一部を下に示します。

本研修会は近畿植物同好会の山脇さん、三重大学の福田先生、大阪府立大学の西野先生、当日急遽プチセミナーを開いてくださった人間環境大学の藤井先生の事前準備がなければ開催されなかったことと思います。お忙しいところご準備いただきありがとうございました。さらに、研修会参加者の皆様にも標本作成時の同定作業等で非常にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

観察できた植物の一部：ホソバカナワラビ（オシダ科）、ホラシノブ（ホングウシダ科）、ネズミサシ（ヒノキ科）、ハチジョウキブシ（キブシ科）、ヤブニッケイ（クスノキ科）、オオバグミ（グミ科）、ツゲ（ツゲ科）、ジングウツツジ（ツツジ科）、ヒロハドウダンツツジ（ツツジ科）、ウバメガシ（ブナ科）、オトギリソウ（オトギリソウ科）、キキョウ（キキョウ科）、アキノキリンソウ（キク科）、サジガクビソウ（キク科）、ナガバノコウヤボウキ（キク科）、ヒヨドリバナ（キク科）、スズサイコ（キョウチクトウ科）、アキカラマツ（キンポウゲ科）、タイミンタチバナ（サクラソウ科）、アキノタムラソウ（シソ科）、イブキジャコウソウ（シソ科）、オトコエシ（スイカズラ科）、シンミズヒキ（タデ科）、オニドコロ（ヤマノイモ科）



大山山頂の蛇紋岩地帯にて。参加者のうち2名が別行動だったため、写真に写っていない

2017 年度日本植物分類学会講演会の報告

講演会担当委員 布施 静香

17 回目の日本植物分類学会講演会が 2017 年 12 月 16 日（土）に大阪学院大学で開催されました。今回は 5 名の先生方に下記の順でご講演いただきました。124 名（うち学会員は 65 名）の参加があり、盛大な会になりました。

綿野 泰行（千葉大学大学院理学研究科）

「ハイマツとキタゴヨウ：交雑を通じた遺伝子の種間での交換」

永益 英敏（京都大学総合博物館）「学名の読み方・綴り方—学名のあれこれ入門編」

木下 栄一郎（金沢大学大学院自然科学研究科）「植物の生活史研究—生命表の利用」

邑田 仁（東京大学大学院理学系研究科）「ヒマラヤ造山運動とテンナンショウ属の分化」
 角野 康郎（神戸大学大学院理学研究科）「日本の水草研究はどこまで進んだか」

綿野先生は、ハイマツとキタゴヨウの浸透性交雑に関する有名なご研究を丁寧にご紹介くださいました。永益先生は、ラテン語の歴史から命名法に関する最新のトピックスまでご紹介くださいました。木下先生は、植物種による性転換システムの違いなどをご紹介くださいました。邑田先生は、世界のテンナンショウ属を対象にして総論から各論までを美しい写真を交えてご紹介くださいました。角野先生は、日本の水草研究の全体像について研究の歴史から保全に関する問題点まで幅広くご紹介くださいました。さらには地方の植物研究会が抱える問題についてもお話しくださりました。

ご多忙中にも関わらず快くご講演を引き受けてくださった演者の皆様、遠方より足をお運びくださった参加者の皆様、そして会場を手配して下さった大阪学院大学名誉教授の林一彦先生に深く感謝いたします。なお、一部ご案内していた講演順序と異なりましたこととお詫びいたします。

懇親会での写真



日本植物分類学会講演会に参加して

伊藤 巖・村上翔・渡邊 誠太（京都大学大学院理学研究科植物学教室）

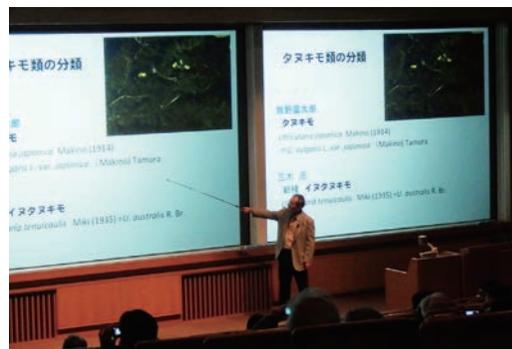
12月16日に開催された日本植物分類学会講演会に参加させていただきました。どの講演も非常に興味をそられる内容で、僕にとって大変充実した一日となりました。

永益先生は植物の学名についてのご講演で、植物だけでなく他の生物の命名規約についても話され、さらにはラテン語の数詞や性の話など、内容は多岐にわたっていました。僕にとって聞きなじみのない内容が多く、講演が進むにつれて「次は何をお話しくださるのだろうか」とわくわくしながら聞いていました。

角野先生のご講演は絶滅危惧の水草の話から始まり、外来種の定着、植物同好会の高齢化に注目した内容でした。水草の話は大学でもほとんど聴いたことがなく、興味がそられる内容ばかりでした。そして、外来種による在来種の駆逐が深刻だということや、アマチュアの方たちが集まる植物同好会に若い人がほとんどいないという話は、決して他人事ではない、大きな問題であるということを変更して認識しました。（伊藤 巖）



永益先生のご講演



角野先生のご講演

「種とは何か」、分類学を象徴するこの言葉は研究室に入って以来、私を悩ませ続けています。

木下先生の、生活史と各ステージの個体数をまとめた表（生命表）に関する今回の講演を聞いて、種は生活史を通してのまとめであり、その生物の生存状態や繁殖様式と深くかかわっているのだと思いました。個体数の維持の点から見ると、繁殖成功の度合は大きな影響を持つものだと感じました。

木下先生は例として、テンナンショウとクロユリの説明をしてくださいました。どちらも種子繁殖のみではなく、栄養繁殖をし、またステージによって性を変える植物として知られています。テンナンショウは個体サイズが小さいと花を咲かせませんが、中程度で雄花のみを咲かせ、大きくなると雌花のみを咲かせるそうです。クロユリは個体サイズが大きくなるにつれ、1つの雄花をつける雄株、1つの両性花をつける両性株、複数の両性花をつける両性株と変化するそうです。これらの植物の生命表から、繁殖戦略の違いを実感することができました。この講演を聞いて、植物は環境に適応しながら個体数を維持しており、それには私が予想していた以上に栄養繁殖が貢献しているのだと思いました。

今回の講演会に登壇された先生方の講義を一同に聞く機会はそうそうないので、大変貴重な経験となりました。（村上翔）

私は、今回初めて日本植物分類学会講演会に参加しましたが、先生方の素晴らしい研究成果を聴くことができ、とても勉強になりました。

綿野先生はハイマツとキタゴヨウの浸透性交雑による遺伝子交流のお話でした。浸透性交雑はとても難しい問題だと感じていましたが、先生はマツの仲間の葉緑体が父性遺伝する特徴を活かし、ミトコンドリアDNAと葉緑体DNAの比較等をされることで、浸性交雑が起きている集団の実態を浮き彫りにされていました。蔵王の例では、全山が言わば巨大な交雑帯になっていることに驚きました。また、遺伝子が浸透しているにも関わらず、低標高にはキタゴヨウ、高標高にはハイマツのような外部形態の個体が現れることが面白いと思いました。

邑田先生はヒマラヤ造山運動とテンナンショウ属の分化についてのお話でした。仏炎苞の色や肉穂花序の付属体の形、葉序や副芽の付き方などテンナンショウ属がこんなに多様だということに驚きました。特に肉穂花序の付属体は変化に富んでおり魅力的でした。キバナテンナンショウ類では同じ黄色の仏炎苞をもつものでも系統が異なるそうなので、収斂や平行進化の可能性とその理由が気になりました。また、黄色の仏炎苞には蜜腺の横縞があることを知り、その構造と生物学的意義に興味を持ちました。先生は、テンナンショウ属の分化・分布変遷は、ヒマラヤ山脈だけでなく横断山脈まで続く山塊の影響もあげられました。今後はさらに分子系統の分岐年代推定などの研究が進み、より詳細なテンナンショウ属の多様化の歴史が明らかにされていくのだらうと思いました。

講演会後に行われた懇親会では、地域で活躍されている先生方や博物館の先生方ともお話することができ、皆さんからさまざまな植物についてご教授いただきました。私にとって、とても有意義な一日でした。ありがとうございました。（渡邊誠太）



邑田先生のご講演

2017年度第4回メール評議員会議事抄録

庶務幹事 田中伸幸

2017年12月15日（金）～12月28日（木）に2017年度第4回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は2017年度の事業報告案と会計決算案、2018年度の事

業計画案および予算案を評議員の方々に審議していただくものです。なお、12月末日が会計締切りであるため、この2017年第4回メール評議員会での決算額に概算部分があります。2018年3月7日の評議員会と3月9日の総会にて提案されます同議案には、その概算部分について最低限の修正が加えられている箇所がありますことをご承ください。

開催日時：2017年12月15日（金）～12月28日（木）

開催方法：電子メール媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長選出

慣例にしたがい伊藤元己会長を議長とすることに反対はなかった。

審議事項

第1号議案 2017年度事業報告案

第2号議案 2017年度決算案

第3号議案 2018年度事業計画案

第4号議案 2018年度予算案

審議結果

第2号議案および第4号議案において、修正の後、承認多数で可決された。委任状はなかったが、白票扱いが1票であった。

第1号議案 【賛成12票、反対0票、白票1票】

第2号議案 【賛成12票、反対0票、白票1票】

第3号議案 【賛成12票、反対0票、白票1票】

第4号議案 【賛成12票、反対0票、白票1票】

議事録署名人として黒沢高秀評議員、海老原淳評議員が選出された。

お知らせ

2018年度第17回日本植物分類学会大会公開シンポジウム

「郷土植物学が支える日本の科学」のご案内

第17回大会実行委員長 山田敏弘

第17回大会（金沢）の最終日に、表記のような公開シンポジウムを開催いたします。是非、ご参加ください。また、非会員の方も無料で事前申し込み無しでご参加いただけますので、関係の方々にもご周知ください。

【日時】 2018年3月10日（土）13時30分～16時

【場所】 金沢歌劇座 大集会室（金沢市下本多町6-27）

【内容】 自分たちが住む郷土の様子や歴史のユニークさについては小学校の社会科で詳しく習うのに、郷土の植物のユニークさについて理科で習わないのはなぜでしょうか？ その原因は「教えられる人が少ない」ことにあるのかもしれませんが。このシンポジウムでは、郷土の植物を観察し続けているみなさん（郷土植物研究者）や、その活動を支援するみなさんに話題提供をいただきます。そして、郷土植物研究が、

研究だけでなく、科学への入り口を子供たちに開くこと（初等教育）や、大人たちが科学への関心を持ち続けること（生涯教育）にも、大いに役立つことを紹介できればと思います。

1. 五百川 裕（上越教育大学）「学校教育と郷土植物学」
2. 梅林 正芳（金澤植物図研究会）「植物図描画講習会のすすめ」
3. 本多 郁夫（石川県絶滅危惧植物調査会）「石川県産オニバスの今昔」
4. 寺田 和雄（福井県立恐竜博物館）
「地方博物館の特徴を活かした進展的活動～アマチュアと共に創り出す未来～」
5. 海老原 淳（国立科学博物館）「郷土植物学と世界をつなげる ～元シダ少年が今できること～」

【お問い合わせ】日本植物分類学会第17回大会（金沢大会）実行委員会
〒920-1192 石川県金沢市角間町 金沢大学理工研究域自然システム学系内
電話：076-264-6208 電子メール：moushiko@17amjsps.com
（お問い合わせの場合には、できるだけ電子メールをお使いください）

石川県立自然史資料館 標本庫見学会のお知らせ

第17回大会実行委員見学会担当 中野 真理子
同事務局長 小藤 累美子

第17回大会（金沢）の翌日に、エクスカージョンを開催します。参加をご希望で、まだ事前連絡がお済みでない方は、大会当日に受付にてお申し込みください。

【日時】 3月11日（日）9時30分～16時30分
（開始時刻は固定。終了時刻は各自の興味に応じて流れ解散）

【場所】 石川県立自然史資料館
（〒920-1147 石川県金沢市銚子町1-441 <http://www.n-muse-ishikawa.or.jp/riyou/raikan.html>）

【収蔵資料】 石川県内で収集された維管束植物のさく葉標本を中心とする25万点余
（<http://www.n-muse-ishikawa.or.jp/motto/folder67/ver2.html#bb>）

【お問い合わせ】 日本植物分類学会第17回大会（金沢大会）実行委員会
（同上：お問い合わせの場合には、できるだけ電子メールをお使いください）

* 3月10日（土）の宿泊が大変込み合うことが予想されます。お早めの手配をお勧めいたします。

評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 田中 伸幸

日本植物分類学会第17回大会（於：金沢市）の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催いたします。評議員、幹事会等の関係各位のご出席をよろしくお願いいたします。

日時：2018年3月7日（水）16時～19時
場所：金沢大学サテライト・プラザ1階会議室
（金沢市西町三番丁16番地 金沢市西町教育研修館内）

なお、詳細は関係各位におってご連絡いたします。審議事項につきましてご意見やご要望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員長のいずれかにお伝えください。

2018 年度総会のお知らせと審議事項

庶務幹事 田中 伸幸

3月9日に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いします。

1. 2017 年度事業報告案 (10 ページ参照)
2. 2017 年度決算報告案 (12, 14 ページ参照)
3. 2018 年度事業計画案 (11 ページ参照)
4. 2018 年度予算案 (13, 14 ページ参照)
5. 平成 30 年 4 月入会の植物地理・分類学会会員初年度会費減免案
6. 和文誌『分類』と植物地理・分類学会誌『植物地理・分類研究』の統合および『植物地理・分類研究』の誌名・巻号引継案
7. その他

2017 年度事業報告案

(1) 集会等の開催

- ・ 学術集会, 講演会, 研修会
年次学術集会 (日本植物分類学会第 16 回大会: 3 月 9 ~ 12 日 京都市) を開催した。
2017 年度講演会を開催した (2017 年 12 月 16 日: 大阪学院大学)。
2017 年度野外研修会を開催した (2017 年 9 月 15 ~ 17 日: 三重県菅島・答志島)。
- ・ 総会, 評議員会
年次総会を年次学術集会に合わせて開催した (3 月 11 日 京都市)。
評議員会を 1 回 (3 月 9 日 京都市), 臨時評議員会を 1 回 (3 月 10 日 京都市) およびメール評議員会を 4 回開催した (ニュースレター No. 64, No. 65, No. 66, No. 67 で報告)。

(2) 出版物の刊行

- ・ 学会誌の発行
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 68 巻 1 ~ 3 号 (計 3 冊) を発行した。
和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第 17 巻 1 ~ 2 号 (計 2 冊) を発行した。
- ・ ニュースレター
『日本植物分類学会ニュースレター』64 ~ 67 号 (計 4 冊) を発行した。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動を行った。

- ・ 絶滅危惧植物専門第一委員会
各都道府県の主任調査員・調査員の協力の下、環境省の第 5 次絶滅危惧植物の全国調査を実施した。
- ・ 絶滅危惧植物専門第二委員会
コケ類, 藻類, 菌類, 地衣類の各グループの委員及び調査協力者により、環境省の第 5 次絶滅危惧植物の全国調査を実施した。
- ・ 植物データベース専門委員会
- ・ 学会賞選考委員会 (ニュースレター No. 64 で報告) (永益英敏委員長)
- ・ 論文賞選考委員会 (ニュースレター No. 64 で報告) (田村実委員長)
- ・ 大会発表賞選考委員会 (ニュースレター No. 65 で報告)
- ・ ABS 問題対応委員会 (村上哲明委員長)

- ・国際シンポジウム準備委員会（池田博委員長）
- ・植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会（角野康郎委員長）
- ・国際命名規約邦訳委員会（永益英敏委員長）

(4) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行った（ニュースレター No. 65 で報告）。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行った（ニュースレター No. 65 で報告）。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行った（ニュースレター No. 65 で報告）。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行った：日本学術会議、自然史学会連合、日本分類学会連合など。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT), および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携した。

(6) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行った。
- ・『植物分類, 地理』, 『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』, 『分類』各誌の論文 PDF を J-STAGE に移行公開作業を行った。
- ・植物分類学関連情報（学術集会, 研究動向, 出版物, 公募）を収集し, ニュースレター, ホームページ等で提供した。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。
- ・『植物分類学研究マニュアル』（仮題）の出版計画を進めた。

2017 年度決算報告案 → 12, 14 ページに掲載

2018 年度事業計画案

(1) 集会等の開催

- ・学術集会, 講演会, 研修会
 - 年次学術集会（日本植物分類学会第 17 回大会：3 月 8 ～ 11 日 金沢市）を開催する。
 - 2018 年度講演会を開催する（2018 年 12 月 15 日：大阪学院大学）。
 - 2018 年度野外研修会を開催する（日時, 場所共に未定）。
- ・総会, 評議員会
 - 評議員会を開催する（3 月 7 日）。
 - 年次総会を年次学術集会に合わせて開催する（3 月 9 日）。

(2) 出版物の刊行

- ・学会誌の発行
 - 英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 69 巻 1 ～ 3 号（計 3 冊）を発行する。
 - 和文誌『植物地理・分類研究 (The Journal of Phytogeography and Taxonomy)』第 66 巻 1 ～ 2 号（計 2 冊）を発行する。
- ・ニュースレター
 - 『日本植物分類学会ニュースレター』68 ～ 71 号（計 4 冊）を発行する。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し, 目的に沿って活動する。(15 ページにつづく)

2017年度決算報告案（一般会計）

収入の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
会費					
通常（一般）	5,000	725	3,625,000	4,029,640	404,640
通常（学生/海外）	3,000	124	372,000	347,240	△ 24,760
団体会員	8,000	19	152,000	111,352	△ 40,648
特別会計から移管（会費値上げまでの補正）			1,250,000	1,250,000	0
特別会計から移管（APG出版補助）			540,000	0	△ 540,000 注1
バックナンバー販売			0	0	0
利息			0	0	0
雑収入			0	0	0
小計			5,939,000	5,738,232	△ 200,768

支出の部	単価	数	予算	決算	予算との差異
大会補助費			100,000	0	100,000 注2
講演会補助費			70,000	20,491	49,509
出版物印刷費					
APG vol.68(1,2,3)	880,000	3	2,640,000	2,353,594	286,406
分類 vol.17(1,2)	650,000	2	1,300,000	1,456,056	△ 156,056
ニューズレターNo.64-67	50,000	4	200,000	206,496	△ 6,496
英文校閲費			50,000	50,000	0
出版物送料					
APG送料	100	3,000	300,000	103,322	196,678 注3
和文誌送料	100	2,000	200,000	26,700	173,300 注3
NL送料	80	4,000	320,000	516,593	△ 196,593 注3
会議費			50,000	0	50,000
学会賞表彰経費			50,000	46,292	3,708
自然史学会連合負担金			20,000	20,000	0
分類学会連合分担金			10,000	10,000	0
事務局管理費					
消耗品費			50,000	27,153	22,847
交通費			25,000	0	25,000
アルバイト賃金			0	0	0
封筒等印刷費			200,000	183,924	16,076
通信費（小包手数料を含む）			50,000	40,260	9,740
手数料・その他			20,000	11,430	8,570
自動振替集金代行基本料			3,240	3,240	0
自動振替口座確認手数料	130	160	20,800	19,569	1,231
レンタルサーバー使用料			26,000	26,244	△ 244
国際シンポジウム積立金			0	0	0
予備費			100,000	0	100,000
合計			5,805,040	5,121,364	683,676

単年度収支	133,960	616,868	△ 482,908
前年度からの繰越金	4,534,815	4,534,815	0
次年度への繰越金	4,668,775	5,151,683	△ 482,908

注1: 雑誌出版から見込まれる特別収入（バックナンバー販売、カラーチャージ、著作権使用料）のうち、APGの編集費用を除いたもの。

注2: 学会からの補助を必要としなかった。

注3: まとめて送ったことによる。

2018年度予算案（一般会計）

収入の部	単価	数	予算	前年度予算との差異	
会費					
通常（一般）	7,000	704	4,928,000	1,303,000	注1
通常（学生/海外）	3,000	105	315,000	△ 57,000	注2
団体会員	8,000	19	152,000	0	
移行会員（一般）	5,000	50	250,000	△ 250,000	注3
特別会計から移管（会費値上げまでの補正）			0	△ 1,250,000	注4
特別会計から移管（APG出版補助）			310,000	△ 230,000	注5
合計			5,955,000	△ 484,000	

支出の部					
大会補助費			100,000	0	
講演会補助費			70,000	0	
出版物印刷費				0	
APG vol.69 (1,2,3)	930,000	3	2,790,000	150,000	注6
植物地理・分類研究 vol.66(1,2)	700,000	2	1,400,000	100,000	注6
ニュースレターNo.68-71	55,000	4	220,000	20,000	注6
英文校閲費			50,000	0	
出版物送料				0	
APG送料	100	3,100	310,000	10,000	注6
和文誌送料	100	2,100	210,000	10,000	注6
NL送料	80	4,100	328,000	8,000	注6
会議費			50,000	0	
学会賞表彰経費			50,000	0	
自然史学会連合負担金			20,000	0	
分類学会連合負担金			10,000	0	
事務局管理費				0	
消耗品費			50,000	0	
交通費			100,000	75,000	注7
アルバイト賃金			0	0	
封筒等印刷費			50,000	△ 150,000	注8
通信費（小包手数料を含む）			50,000	0	
手数料・その他			20,000	0	
自動振替集金代行基本料			3,240	0	
自動振替口座確認手数料	130	160	20,800	0	
レンタルサーバー使用料			26,244	244	注9
国際シンポジウム積立金			200,000	200,000	注10
予備費			100,000	0	
合計			6,228,284	423,244	

単年度収支	△ 273,284	
前年度からの繰越金	5,151,683	
次年度への繰越金	4,878,399	

注1: 会員数・会費の見直しにより更新。

注2: 会員数の見直しにより更新。

注3: 地理・分類学会の会員のうち2017年4月より分類学会に新たに入会する会員から見込まれる収入。

注4: 会費値上げまでの措置のため2017年度のみ設けた補正ため。

注5: 雑誌出版から見込まれる特別収入（バックナンバー販売、カラーチャージ、著作権使用料）のうち、APGの編集費用を除いたもの。

注6: 移行会員の増加を見越して増額。

注7: 幹事会の引継ぎ会議を行う必要があるため。

注8: 新規に封筒を印刷する必要が無いため。

注9: 実態に合わせて更新。

注10: 2022年の開催に備えての積立金。

2017年度決算報告案
(特別会計)

収入	予算	決算	予算との差異
前年度繰越金	2,136,877	2,136,877	0
国際シンポジウム積立金	0	0	0
命名規約和訳販売	140,000	0	△ 140,000
バックナンバー販売	60,000	26,875	△ 33,125
利息	750	55	△ 695 注1
雑収入	50,000	134,162	84,162
APGカラーチャージ	486,000	0	△ 486,000 注2
絶滅危惧維管束植物の調査委託費	10,000,000	10,000,000	0 注3
寄付	0	0	0
合計	12,873,627	12,297,969	△ 575,658

支出

命名規約和訳出版	500,000	0	500,000 注4
国際シンポジウム準備金	0	0	0
国際シンポジウム若手派遣	0	0	0
APG編集作業への謝金	51,000	199,183	△ 148,183 注5
一般会計へ移管（会費値上げまでの補正）	1,250,000	1,250,000	0
一般会計へ移管（APG出版補助）	540,000	0	540,000 注6
絶滅危惧維管束植物の調査費	9,500,000	6,650,000	2,850,000 注7
絶滅危惧植物の調査に関連する雑費	500,000	12,960	487,040 注7
次年度への繰越金	532,627	4,185,826	△ 3,653,199 注8
合計	12,873,627	12,297,969	575,658

注1: 金利が大幅に下がったことによる。

注2: 該当する論文が無かったため。

注3: 自然環境研究センターから委託された調査費。

注4: 次回の出版に備えた積立金として2017年より500,000円/年を繰り越す。

注5: 投稿論文数が増加したこと、印刷用原稿編集時に丁寧に作業するようになったことにより、編集作業量が大幅に増加したため。

注6: 雑誌出版から見込まれる特別収入（バックナンバー販売、カラーチャージ、著作権使用料）のうち、APGの編集費用を除いたもの。

注7: 年内に振込作業が完了していないため。

注8: 命名規約和訳出版として500,000円を含む。

2018年度予算案
(特別会計)

収入	予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	4,185,826	2,048,949
国際シンポジウム積立金	200,000	200,000 注1
命名規約和訳販売	0	△ 140,000 注2
バックナンバー販売	20,000	△ 40,000 注2
利息	100	△ 650 注3
雑収入	50,000	0
APGカラーチャージ	486,000	0 注4
絶滅危惧維管束植物の調査委託費	10,000,000	0 注5
寄付	0	0
合計	14,941,926	2,068,299

支出

命名規約和訳出版	0	△ 500,000 注6
国際シンポジウム準備金	0	0 注7
国際シンポジウム若手派遣	0	0 注7
APG編集作業への謝金	240,000	189,000 注8
一般会計へ移管（会費値上げまでの補正）	0	△ 1,250,000 注9
一般会計へ移管（APG出版補助）	310,000	△ 230,000 注10
絶滅危惧維管束植物の調査費	9,500,000	0 注11
絶滅危惧植物の調査に関連する雑費	500,000	0 注12
次年度への繰越金	4,391,926	3,859,299 注13
合計	14,941,926	2,068,299

注1: 2022年の開催に備えての積立金。

注2: 2017年の実績に基づき更新。

注3: 2017年の水準に基づき更新。

注4: APGのカラー図表に対する課金（18,000円×27個として計算）。

注5: 絶滅危惧維管束植物の調査のため、自然環境研究センターから委託される予算。

注6: 次回の出版に備えた積立金として2017年より、特別会計の中で500,000円/年を繰り越す。

注7: シンポジウムの開催がないため。

注8: 前年の状況に基づき増額（80,000円/号）。

注9: 会費値上げまでの措置のため、2017年度のみ設けた補正。

注10: 雑誌出版から見込まれる特別収入（バックナンバー販売、カラーチャージ、著作権使用料）のうち、APGの編集費用を除いたもの。

注11: 絶滅危惧維管束植物の調査費。

注12: 絶滅危惧植物の調査に関連する振り込み手数料などの事務経費。

注13: 命名規約和訳出版として1,000,000円、国際シンポジウム積立金として200,000円を含む。

- ・絶滅危惧植物専門第一委員会
各都道府県の主任調査員・調査員の協力の下に、環境省の第5次絶滅危惧植物の全国調査を実施する（前年度から継続）。
- ・絶滅危惧植物専門第二委員会
コケ類、藻類、菌類、地衣類の各グループの委員及び調査協力者により、環境省の第5次絶滅危惧植物の全国調査を実施する。
- ・植物データベース専門委員会
- ・学会賞選考委員会
- ・論文賞選考委員会
- ・大会発表賞選考委員会
- ・ABS 問題対応委員会
- ・国際シンポジウム準備委員会
- ・植物分類学の将来の発展と普及に関する委員会
- ・国際命名規約邦訳委員会

(5) 表彰

- ・日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）の授与を行う。
- ・日本植物分類学会論文賞の授与を行う。
- ・日本植物分類学会大会発表賞の授与を行う。

(6) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・国内学会連合等への参加・連携を行う：日本学術会議、自然史学会連合、日本分類学会連合など。
- ・The Korean Society of Plant Taxonomists (KSPT), および Taxonomy and Evolution Division, the Botanical Society of China (BSC) 等と連携する。

(7) その他

- ・学会刊行物のバックナンバー等の販売と整理を行う。
- ・当年度発行の『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』と『植物地理・分類研究』の論文 PDF を J-STAGE で公開する。
- ・植物分類学関連情報（学術集会、研究動向、出版物、公募）を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供する。
- ・学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行う。
- ・『植物分類学研究マニュアル』（仮題）の出版計画を進める。

2018 年度予算案 → 13, 14 ページ

